

## 負荷が少ない場面における韓国人日本語非母語話者の 謝罪ストラテジー

### Strategies of apology by Korean non-native speakers of Japanese in light weightiness situation

高 暎喜 (千葉大学, 人文社会科学研究科)

Younghee KO (Chiba University,  
Graduate School of Social Sciences and Humanities)

#### Abstract

This paper is a research about apologies by setting up a simulation scene, in which some intimate friends apologize in person. When native Korean speakers apologize to other native Korean speakers or to native Japanese speakers, there are some differences between them in the aspects of which strategy is adopted, what kind of feelings they have, and what phrase is used to express their meaning and to start this situation. The aim of this paper is to demonstrate and analyze this human behavior by using the role play data. As a result, 12 apologizing strategies were found to be used at the setting of an apology scene. When the two persons were both native Korean speakers, they talked and apologized very freely, within the rules of Korean language. When partners turned out to be native Japanese speakers, however, they had to manage their own Japanese language rules and communicate sensitively while they were speaking and expressing what they thought. In other words, the significant difference for native Korean speakers who tried to make an apology is the effect of linguistic awareness among different situations.

#### 1. はじめに

文化間の場面の出来事は文化内の場面の出来事と本質的に異なる(Neustupný 1994). 異なる言語行動が思わぬ誤解を生み, それが積み重なり, 結果的にお互いの姿を歪めてしまうことがある(ファン 1998). 近年, 日本と韓国は人的・物的交流は盛んになり, 日本人と韓国人がコミュニケーションをする際に生じる誤解や摩擦の発生する機会が増加しているのも事実である. その特定の言語場面の言語行動の一つとして謝罪がある.

謝罪という言語行動はほとんどの言語にみられる発話行為であるが, 謝罪の表れ方は発話者の帰属するグループによって異なる. その背後に隠されている文化的背景にはどのような言語的, 文化的な仕組みがあるのだろうか. 本研究では, 韓国人母語話者同士の母語場面, そして韓国人と日本人が出会う接触場面において, とくに謝罪の負荷が少ない状況下で, 韓国人がどのような謝罪を行うかを明らかにすることを目的とする.

## 2. 先行研究

まず、先行研究として謝罪発話行為 Blum-Kulka, House and Kasper(1989), 池田(1993)と言語管理理論(ネウストプニー1995)を紹介していく。Blum-Kulka, House and Kasper(1989)は、謝罪行為を①直接発話行為、②間接発話行為、③直接発話行為と間接発話行為の組み合わせの発話行為に分類している。そして、間接発話行為をさらに下位分類(理由・弁解／責任承認／報償の申し出／二度起きない旨の約束／強化(Intensification)／Downgrading)している。本研究も主に Blum-Kulka, House and Kasper(1989)の観点を採用し、謝罪行為を検討する。また、池田(1993)は、謝罪を Face と人間関係と深く関わっているものと考えており、日米の謝罪がどのように行われているのかを質問調査による調査を行った。六つの場面に対して八つ(①明確な謝罪表明②説明・弁解③責任承認④補償の申し出⑤二度と起きない旨の表明⑥相手への配慮⑦相手への攻撃弱体化⑧感情表出・注意喚起)の謝罪ストラテジーが使用され、それぞれの文化社会において Face のとらえ方、謝罪の意味や機能が異なることが報告された。

韓国人と日本人の日本語による接触場面では、謝罪場面において参加者が何を問題であると設定し、どう処理しているのか、逸脱に対する参加者の留意と評価を管理プロセスにより実証的に記述していく必要がある。そのため、言語管理理論(ネウストプニー1995)を参考に考察する。本研究では、ネウストプニー(1995)の言語管理理論の中核的な概念である規範に注目し、韓国人が接触場面の謝罪に関してどのような「規範」を持っていたかに焦点を当て分析を行っていく。

## 3. 研究方法

### 3.1 調査方法

本研究が目指すのは、謝罪行為が行われる際、韓国人同士の母語場面と韓国人と日本人の日本語による接触場面にはどのような特徴があり、どのように謝罪談話が展開されていくのかを比較することである。そのため、同じような状況下でどのような言語行動をとるか、ある程度まとまった数の資料を収集する必要がある。そこで本研究では、ロールプレイによる資料の収集とその場面についてのフォローアップ・インタビュー(ファン 2002, 以下, FUI とする)を併せて行うことにした。謝罪研究におけるロールプレイ調査は見当たらないが、依頼、断りの研究においては、熊井(1992), 水野(1996a, 1996b)などでロールプレイ調査がよく行われている。

ロールプレイによる調査も実際の会話場面とは異なる可能性はあるものの、質問紙調査に比べて実際の場面に近いデータが得られるという利点がある。そのため、謝罪行為を相互行為としてみるができる。さらに、ロールプレイ調査の後にインタビュー調査も行うことで、調査協力者の意識についても確認することができる。

### 3.2 調査対象場面と調査協力者

調査対象場面は、日常生活の中で親しい友人同士の間で頻繁に起こりうる、相手の負荷が少ない場面を設定した。以下にロールプレイで使用したロールカードを示す。

#### 【ロールカード A】

B がすでに読み終わった漫画を 3 日前に借りました。今日、B と同じ授業を取っているので、その時に漫画を返すことになっています。しかし、忘れてしまい、今日、持って来てません。

#### 【ロールカード B】

自分がすでに読み終わった漫画を 3 日前に A に貸してあげました。今日、A と同じ授業を取っているので、その時に漫画を返してもらうことになっています。自分にとってその漫画はすでに読み終わったので大事な漫画ではありません。

データ収集の際、協力者の様々な社会的属性をどのように統一するかは極めて重要である。本研究では、調査協力者の社会的地位、親疎関係を以下のように統制した。

1. 韓国語母語場面：現在韓国に居住している韓国語母語話者を対象にした。全員、ある地方の H 大学の日本語学科に所属している大学生である。
2. 日本語接触場面：現在日本に 2 年以上居住し、日本語レベルは中級以上の韓国人を対象にした。全員、関東地方の大学に在学している大学生である。
3. 依頼の際に、自分の親しい友人を連れてきて会話をして欲しいと依頼した。従って、各ペアは実生活において親しい 2 名である。

その結果、本調査では韓国語母語場面においては、親しい友人関係にある韓国語母語話者 15 ペア、30 名(以下、謝罪する側を KA, K1A~K15A, 謝罪を受ける側を KB, K1B~K15B とする)、また日本語接触場面においては、同様に親しい友人関係にある 15 ペア、韓国語母語話者 15 名、日本語母語話者 15 名(以下、韓国人母語話者を K16A~K30A, 日本語母語話者を J16B~J30B とする)の協力を得ることができた。

### 3.3 分析の枠組み

#### 3.3.1 謝罪の定義

人は相手に損害を与えたり、不快な思いをさせたりした場合、その関係を修復しようとする (Goffman 1971)。謝罪は、話し手が相手に精神的または物理的な損害を与えたと思ったとき、自分の過ちや相手への被害などの責任を認め、許しを求め、それによって相手との人間関係を取り戻す、回復する行為である。つまり、謝罪談話の最終的な目的は、相手との関係修復である。実際に謝罪を行う場合は、相手との関係の修復に至るまで直接的な謝罪表現だけではなく、広範囲の謝罪ストラテジーが用いられる。本稿では、両者が親しい関係にある韓国人同士の母語場面、および韓国人と日本人の日本語による接触場面での謝罪ストラテジーを検討する。

#### 3.3.2 データ分析の方法

本稿では、韓国人が母語場面においてどのような謝罪を行っているのか、そして、接触場面では相手の日本人に対してどのような謝罪を行うのかをみていく。まず本研究では、Blum-Kulka, House and Kasper(1989)を基に謝罪行為を以下の 12 のストラテジーに分類した。

- (1) 直接謝罪：意図していることについて、直接的な表現形式「決まり文句」(=申し訳ない、すみません、ごめんのような表現)をする発話.
- (2) 責任承認：謝罪の対象となる内容と事実を述べ、明確に責任を認めることによって、間接的に謝罪を遂行している発話.
- (3) 理由・弁解：謝罪の対象となる事柄がどのようにして生じたのかを説明し、事態を変えようとする発話.
- (4) 補償の提案：自分が相手に被害を与えたことに対して何か他のことで補償しようとする発話.
- (5) 繰り返さない旨の約束：同じ過失を繰り返さないことを約束する発話.
- (6) 配慮：KB/JBの気持ちを理解していることを伝えたり、相手を心配する態度を示したり言葉をかけたりする、相手への思いやりを示す表現の発話.
- (7) 次への約束：相手との関係修復のために「次への約束」をする発話.
- (8) 謝罪終了のための話題転換：相手との関係修復をしようとする過程で話題となっている謝罪以外の内容について話したり、話題転換をする発話.
- (9) 依頼：謝罪の相手に恩恵を求めたり、負担をかけたりする発話.
- (10) 不満表明：謝罪の相手に対して不満表明をし、相手の立場を脅かす発話.
- (11) 非言語：「表情」「ジェスチャー」「態度」「身体の接触」などの非言語的な要素や、周辺言語を通してお互いの理解を助けるもの.
- (12) その他

次に、韓国人が謝罪行為を行う際にどのようなストラテジーをどの程度使用し、さらにどのような意識を持っているのかを FUI を用いて確認した。そして、韓国人がどのような発話を用いて、謝罪談話を展開していくのかを考察した。

## 4. 分析の結果

### 4.1 データの概要

ここからは、謝罪ストラテジーの枠組みに沿って、母語場面と接触場面における韓国人の謝罪行為を分析する。韓国人は相手が同じ韓国人の友人 KB(謝罪を受ける側)である場合と日本人の友人 JB である場合でどのような発話をし、どのように謝罪談話を展開していくのかを検討する。以下の表 1 に、全体的な謝罪ストラテジー使用の傾向を示す。

表 1: 謝罪ストラテジー使用回数と平均使用回数

	(1) 直接	(2) 責任	(3) 理由	(4) 補償	(5) 繰返	(6) 配慮	(7) 約束	(8) 依頼	(9) 不満	(10) 話題	(11) 非言語	(12) 他	合計
母語場面	23	18	11	5	0	16	18	2	7	3	19	4	<b>126</b>
接触場面	18	17	4	0	1	22	13	0	0	26	68	5	<b>174</b>
母語場面の平均使用回数	2	1.5	0.9	0.4	0	1.3	1.5	0.2	0.6	0.3	0.9	0.3	<b>0.8</b>
接触場面の平均使用回数	1.5	1.4	0.3	0	0.1	1.8	1.1	2.2	0	0	5.7	0.4	<b>1.2</b>

謝罪行為が行われる際に使用された「謝罪ストラテジー」の数は、母語場面で126回、接触場面で174回であった。場面によって最も差が大きいのは「非言語」で、「理由」、「配慮」、「不満」、「話題」などでも差が見られた。

それぞれの謝罪ストラテジーを調査協力者が一つの会話でどれくらい使用しているのかについては、母語場面では「直接謝罪」が平均使用回数2回、「責任承認」と「次への約束」が1.5回で、大部分のストラテジーは平均使用回数が1回未満であった。接触場面では「非言語」が平均使用回数5.7回、「謝罪終了のための話題転換」が2.2回、「配慮」が1.8回使用されており、ここでは大部分のストラテジーの平均使用回数は1回以上であった。

このように、母語場面での謝罪ストラテジーの使用と接触場面での謝罪ストラテジーの使用について使用回数や平均回数について大差がついたものもあれば、あまり差がないものもある。そこで以下の分析では、韓国人の謝罪言語行動は、相手が同じ母語話者の韓国人の場合と相手が日本人の場合とでどのような特徴をもち、さらにそれがどのような言語意識によるものであるかについて、母語場面と接触場面とを照らし合わせながら述べていく。

## 4.2 接触場面における韓国人日本語話者のストラテジー

本節では、韓国人が使用した謝罪ストラテジーの両場面での傾向の違いについて、とくに接触場面における謝罪ストラテジーの使用に注目し、会話例を紹介しながらその特徴について考察を加える。

### 4.2.1 直接謝罪

表 2: 直接謝罪

	母語場面	接触場面
普通体	15	15
丁寧体	NA	1
特別丁寧体	8	2
合計	23	18

表 2 に示したように、母語場面においては miannhe(ごめん=普通体)の使用例が 15 件、chesonghamnida(申し訳ない=特別丁寧体)の使用例が 8 件あった。調査協力者の母語話者は親しい友人関係にあるが、それぞれ年齢にはばらつきがあった。守屋(2001)では、韓国人母語話者は同等あるいは目下の人に miannhe を使用し、chesonghamnida は目下の人が目上の人に向かって使用と指摘しており、本データでも同様の結果が見られた。

接触場面では、直接謝罪として「ごめん」「すみません」「申し訳ない」が現れ、そのうち「ごめん」が 18 件中 15 件と最も多かった。接触場面においては年齢差にかかわらず、くだけた場面に用いられる「ごめん」が使用されており、相手 JB と親しい友人であることがその要因になったと推測できる。以下の例 1 は、「ごめん」の使用例である。

例 1 : K16

- 1 K16A あ!、(hhh)、忘れてきたーあー
- 2 J16B (hhh)、えー (hhh) あれ、この間言ってたやつ
- 3 K16A うん、どうして、ごめん
- 4 J16B まあ、いいよ、いつでも、(hhh)

上記の例は、K16A が「あ!、(hhh)、忘れてきたーあー」と約束を思い出し、先に発話をしている。それに対して、J16B は「hhh、えー(hhh)あれ、この間言ってたやつ」と答えている。K16A は再び自分が約束を守れなかったことに対して「うん、どうして、ごめん」という発話をし、自ら謝っている。このように、他の 11 例においても「ごめん」の使用は KA が約束を守れなかったことに対して「ごめん」を使用している。K16A に対する FUI では、「ごめん」という言葉は短いので口から出やすい、友人関係であるため一番適切であると報告された。

一方、「すみません」と「申し訳ない」については、「ごめん」と組み合わせて使われることが以下の例 2 からわかる。

例 2 : K16

- 1 K16A あ!、(hhh)、忘れてきたーあー
- 2 J16B (hhh)、えー (hhh)、あれ、この間言ってたやつ
- 3 K16A うん、どうして、ごめん
- 4 J16B まあ、いいよ、いつでも、(hhh)
- 5 K16A 全然良くない、最近、物忘れがひどくてさ、(髪の毛を触る)
- 6 J16B まあ、私も忘れるし (hhh)
- 7 K16A いやーうん (3 秒)
- 8 J16B 今度、今度
- 9 K16A そう、そう、そう、そう、今度いつ会うんだっけ?
- 10 J16B 来週火とか
- 11 K16A 来週、来週か? 来週この授業で必ず持ってきます、すみません

上記の例では、3 行目で K16A が「ごめん」を使い直接謝罪を行っているが、「次への約束」を行う際に再度 J16B に「すみません」と謝っている。日本語の会話でよく使用される「スピ

一チレベルの変化」は、会話の終了の合図として現れる(大浜 1997). 例 2 においても, 11 行目で「必ず持って来ます」と丁寧体にシフトしており, それにともなって謝罪表現も「すみません」へとシフトすることによって謝罪談話が終了している. よって, ここでの KA による「すみません」と「申し訳ない」は, 謝罪場面を終了させるために丁寧度を高めたものであると思われる.

#### 4. 2. 2 責任承認

表 3 に示したように, 母語場面での「責任承認」は, 「明示的な責任承認」(13 回)と「暗示的な責任承認」(5 回)が現れた. 暗示的なストラテジーとしては, 文末を完成させない形により, 謝罪の内容や事実を述べても自分の否または自分の責任を認めていない表現を使用したものがあつた. KA の FUI によると, 親しい友人同士の間ならこのくらいの謝罪場面では明確な責任承認のような表現はしなくても大丈夫なのだという. つまり, 本調査が設定した程度の軽い負荷であるときには, KA 自身のフェイスを守ることが優先されるため, 責任承認は回避される傾向にあると考えられる.

接触場面ではこれと対照的に, 明示的な責任承認(17 回)のみ現れた. これに対して, 暗示的な責任承認は見られず, 接触場面の特徴として捉えることができる.

表 3: 責任承認

	母語場面	接触場面
明示的	13	17
暗示的	5	0
合計	18	17

以下の例 3 は, 接触場面における K26 の明示的な責任承認の例である.

#### 例 3 : K26

- 1 J26B あのさ、前、貸した漫画読んだ？、あれ、結構面白くない？
- 2 K26A あれさ、ねえーおわーって〇〇を読んだけど
- 3 J26B うん
- 4 K26A あれさ、(立ち上がって B を見る) 持って来なかったんだよ！
- 5 J26B 今日？、全然良いよ、全然！一で一読んだの？内容？

4 行目で K26A は「あれさ、(立ち上がって B を見る)持って来なかったんだよ！」と自分の責任を認める応答をしている. FUI によると K26 は, 接触場面では自分が起こしたことに対する謝罪の内容について明確に認めるべきであると報告していた. その他の KA も同様に答えており, 母語場面よりも「責任の明示的な承認をする」という規範が強まっていたと言えよう.

#### 4.2.3 理由・弁解

以下の表4に示すように、母語場面での「理由・弁解」は、「謝罪の相手であるKBへの配慮」(4件)、および「謝罪をするKA自身のフェイス保護」(7件)が見られ、「KBへの配慮」よりも「KAのフェイス保護」を目的とする割合が高い結果になっていた。

接触場面では、「理由・弁解」は4件のみで、限られたKAが使用していた。そのうち、3件が自分のフェイス保護のための理由・弁解の事例であった。

**表4:理由・弁解**

	母語場面	接触場面
相手への配慮	4	1
自分のフェイス保護	7	3
合計	11	4

以下の例4は、接触場面における「KAのフェイス保護」の事例である。

例4 : K16

- 3 K16A うん、どうして、ごめん
- 4 J16B まあ、いいよ、いつでも、(hhh)
- 5 K16A 全然良くない、最近、物忘れがひどくてさ、(髪の毛を触る)
- 6 J16B まあ、私も忘れるし、(hhh)

この例でK16Aは「全然良くない、最近、物忘れがひどくてさ」と理由・弁解を述べている。この理由・弁解については、KAは意識していれば忘れないことを「物忘れ」のせいで忘れてしまったと述べており、KA自身が悪いとは認めながらもKA自分のフェイスを守るために自身がおかれている事態や状況を加えている。しかし、全体としては理由・弁解のストラテジーは母語場面に比べて使用されていない。

#### 4.2.4 補償の提案

表5に示したように、母語場面では、「補償の提案」が5回出現したが、接触場面では1回も使用されなかった。

**表5:補償の提案**

	母語場面	接触場面
具体的な申し出	2	0
具体的ではない申し出	3	0
合計	5	0

ここでは、母語場面の「具体的な申し出」の例を見してみる。



例 5 : K10

- 1 K10A 아!야 만화책 못 가져 왔져? 미안허다  
 あー！漫画、持って来てないわ！ごめんねー
- 2 K10B 아우 형! 아—괜찮아요. 근데—그 만화책 다 본거라서  
 あーうー、お兄さん！あー大丈夫です、その漫画もう見たから
- 3 K10A 경해도 그거 갖다줘야 되는거 아니가? 연체료는 형이 주크매 이  
 빼지마랑 갖다줄께  
 そう言われても、それ返さなければならぬでしょう？延滞料金は私が  
 上げるから、へそを曲げるなよ、持って来るから

FUIによると K10A は自分が年上であることから K10B(年下)に負担を与えたくないで、「具体的な補償の提案表現」=「延滞料金は私があげるから」と発話したという。K10A 以外の例でも「延滞料金の支払い」に関する補償の提案の発話がほとんどであり、大部分の韓国人は、漫画を自分で買うよりもレンタルをして読むことが一般的であるという文化的背景をもとに、「延滞料金」の補償の提案の表現をしていると考えられる。

母語場面での母語話者 KA は、自分の過ちや過失をなんらかの形で補償すれば、解決できると認識していると考えられる。一方、接触場面のデータでは、「補償の提案」のストラテジーは 1 回も使用されておらず、日本語の謝罪においては補償の提案は有効なストラテジーとして理解されていないと言える。FUI では、KA は接触場面では友人同士という同等な立場であるのに相手日本人の友人に「補償の提案」をするというのは自分が偉そうな感じがあるとの報告があった。また、KA は、日本語の謝罪行為というのは、謝りの気持ちが入った本心からの謝罪の言葉が必要であると報告しており、謝罪における規範の違いに注目していることがわかる。

4.2.5 繰り返さない旨の約束

母語場面では「繰り返さない旨の約束」のストラテジーは使用例がない。つまり、韓国人話者にとってはこの場面設定に適切なストラテジーとは考えられていないことがわかる。接触場面においては、会話 K24 の例だけであった。

表 6: 繰り返さない旨の約束

	母語場面	接触場面
約束	0	1
合計	0	1

では、K24 はなぜこのストラテジーを使ったのだろうか。以下に例を示す。

例 6 : K24

- 14 J24B そんなでもない、別に読んだし、内容も覚えてるし  
 → 15 K24A いやーありがとう、ありがとう、(うなづく、3秒)(笑いながら照れた  
 感じ) 今度からはこういうことしないように  
 16 J24B まあーそこはね、そこはちょっと気をつけて欲しいんだけど

上記の例では、K24A の「繰り返さないことの約束」は、J24B が 14 行目で謝罪の必要性を否定した後、それに対する謝罪を示す発話としてなされている。そのため、14 行目と 15 行目を隣接ペアと考えた場合、第 1 部にあたる J24B の発話は、「謝罪の不要の表示」ではなく「謝罪要求の表示」であったと推測できるだろう。したがって、ここでは「謝罪の不要の表示」と「謝罪の表示」という隣接ペアが実現されていると考えることが可能である。このように K24 は、J24 からの謝罪要求の隣接ペア第 1 部を受けて、このストラテジーを適用したと考えられる。

4.2.6 配慮

表 7 で示すように、母語場面では、「戸惑いを示す」(6 件)、「相手の状況を聞く」(7 件)、「代案の提示」(3 件)が観察された。一方、接触場面では、22 件中 16 件が相手の状況を聞く表現であった。

表 7: 配慮

	母語場面	接触場面
戸惑いを示す	6	5
相手の状況を聞く	7	16
代案の提示	3	1
合計	16	22

接触場面においては、母語場面とは異なり、親しい友人の JB との人間関係維持のため、JB に好かれない、認められたいという欲求が JB の都合や状況を伺う配慮表現として実現されたと考えられる。

以下に接触場面での相手の状況を聞くストラテジーが使用された例を示す。

例 7 : K18

- 3 K18A あー、(声が小さくなる) ごめん、(JB の目を合わせる) この前かりた漫画ワンピースのちょっと (笑いながら) 持って来るのを忘れた！(JB の体を触る)  
 4 J18B あー良いよ、大丈夫、大丈夫！(お互いに励まし行動・手を触る)、いい、いい  
 → 5 K18A 次、次、いつ持ってくれば大丈夫？  
 6 J18B いつでも良いよ、大丈夫、いつでも大丈夫

上記の例7で K18A は、J18B が「良いよ、大丈夫、大丈夫！」という発話をしたにもかかわらず、「次、次、いつ持ってくれば大丈夫?」と K18A が J18B にもたらした被害の状況を確認し、J18B の都合を尋ねるような配慮表現を発話している。FUI によると、K18A は J18B と交わした約束への不履行に対して謝罪をすべきであるが、なるべく謝罪を深刻にしすぎず、円満に進行していくため、相手 JB の様子を窺いながら相手 JB の状況や都合を考えた配慮をしたという。

#### 4.3.7 次への約束

表 8 のように母語場面では「自分からの約束」(9 件)、「相手から促された約束」(9 件)、合計 18 件の事例が観察された。一方、接触場面では自分からの約束が 13 件中 10 件と多く使用されていた。

表 8: 次への約束

	母語場面	接触場面
自分からの約束	9	10
相手から促された約束	9	3
合計	18	13

本調査の謝罪場面は負荷の少ない場面であるが、そうであっても KA 自ら好ましくない状況を引き起こしてしまったことは事実であり、自ら次への約束を提案するべきであると考えていたと推測される。

以下、KA から次への約束の発話をする場合の例を見てみる。

#### 例 8 : K23

- 7 J23B 別にもう読んだから良いよ、ずっと持ってでも良いよ  
 → 8 K23A じゃー明日、また返すね(うなずき)  
 9 J23B うん、分かった、というか、ずっと持ってでも良いのに

K23A は自ら約束を守らなかったことに対して「次への約束」の発話をし、謝罪行為を行っている。FUI によると、K23 は、相手 JB から「大丈夫」(「許す」という発話があったとしても KA は「自分自身を許さない、相手の許しに甘えない行為」として「次への約束」の発話をしたという。

このように接触場面において KA は相手の許しの有無にかかわらず、謝罪行為を遂行することが必要であるとする規範を持っている場合が多いと言えよう。

#### 4.2.8 謝罪終了のための話題転換

表 9 を見ると「話題転換ストラテジー」は、母語場面では 2 件にとどまっているのとは対照的に、接触場面においては 26 件観察されている。その多くは、ロールプレイの貸し借りの対象になった漫画の「内容の話題」であり、KA からの「話題転換」は 2 件に過ぎない。

表 9: 話題転換

	母語場面	接触場面
内容の話題	2	24
話題転換	0	2
合計	2	26

接触場面でこうしたストラテジーが多く使用されたのは、謝罪遂行において相手 JB との距離を縮めるような話題へと転換させて謝罪を終了させると同時に、相手の所有物である漫画への関心を示すことで相手のポジティブ・フェイスに配慮するストラテジーを使用したと考えることができる。

次の K20 の例は、漫画の内容の話題を出して話題転換を図った例である。

例 9 : K20

- 10 J20B 別に誰かにまたがしたわけではなく
- 11 K20A (hhh)
- 12 J20B そういうわけではなく
- 13 K20A まあ、でも、やー、もろいです
- 14 J20B 本当ですか？
- 15 K20A あの漫画もろいです
- 16 J20B どんどころに気に入りました？
- 17 K20A えーとですね、カウボーイがエイリアンの鼻くそかじてるところが一番面白かったんです

上記の例 9 では、10 行目で J20B が K20A に貸した漫画について「別に誰かにまたがしたわけではなく」と、漫画の所在を確認する発話をしている。それに対し K20A は、11 行目で笑って応答している。それをうけて J20B は再び「そういうわけではなく」と確認している。これに対して K20A は、この J20B の確認には答えず、借りた漫画の内容について「まあ、でも、やー、もろいです」と話しはじめ、その後も漫画の内容の話が続いている。この話題転換について K20A は FUI において、相手の漫画の話題を出すことで、早く謝罪場面を終わらせようとしていたと報告していた。

4.2.9 依頼

「依頼」のストラテジーに関して、母語場面では、「明日、メールしてくれる？」、「あ、そのメール朝に送ってくれる？」、「予約メールでお願い」、「一応、お兄さんが先に払って」のような依頼表現が(7件)あった。母語場面でのこのような依頼表現は、漫画を持って来なかった自分の不注意を自ら再繰り返さないように KB に依頼をする表現であると考えられる。

一方、接触場面のデータでは、「依頼」のストラテジーは1回も使用されていなかった。接触場面の KA の FUI によると、日本では親しい友人の間でも迷惑をかけることは日本の規範に反することであると認識されていた。このことから、「依頼」のようなストラテジーは日本語によ

る接触場面においては、不適切なストラテジーとして見なされていたと考えられる。

**表 10: 依頼**

	母語場面	接触場面
約束履行のための依頼	4	0
修辭的な依頼	3	0
合計	7	0

#### 4. 2. 10 不満表明

表 11 で示すように、母語場面では「相手に対する不満表明」が 3 件使用されたが、接触場面においては 1 例も見られなかった。

**表 11: 不満表明**

	母語場面	接触場面
相手に対する不満表明	3	0
合計	3	0

次の例は母語場面での K15 の例である。

#### 例 10 : K15

- 46 K15B 가져와! 지금!  
持って来て! 今!
- 47 K15A 지금 지금 수업...!  
 今、今、授業...!
- 48 K15B 차비 줄테니깐 갖고와!  
交通代あげるから持って来て!

上記の例は、K15A が K15B の「持って来て! 今!」という発話に対して「今、今、授業...!」と答えている。この K15A の発話は「不満表明」である。さらに、この不満表明に対して K15B は「交通代あげるから持って来て!」と K15A に無理な要求をしている。

ところが、接触場面のデータでは、「不満表明」のストラテジーは全く使用されていなかった。この点に関して KA は FUI において、接触場面では、親しい友人の間であっても人間関係の維持のため、明示的に謝らなければならない弱い立場である KA 側から「相手 JB の立場を脅かす行為」である不満表明をすることは考えられないと報告した。また、接触場面での JB の反応として、表面的に「大丈夫」というような KA に対する優しい配慮表現が多く発話された。つまり、母語場面で発話されたような JB が KA に無理な要求をするなどの発話はなかったため、KA から JB に対して「不満表明」の出現はなかったと考えられる。

#### 4.2.11 非言語

非言語のストラテジーにおいては「周辺言語的ストラテジー」と「身体言語的ストラテジー」の2種類に分類された。ここでは、この二つに分けて、見ていくことにする。

表 12: 非言語

		母語場面	接触場面
周辺言語的ストラテジー	笑い	4	16
	音量	4	3
	ポーズ	2	3
	話し方	1	1
	語尾を伸ばす	0	1
	声の調子	0	1
小計		11	25
身体言語的ストラテジー	動作	2	14
	視線	0	10
	表情	2	9
	身体接触	3	6
	姿勢	0	2
	ジェスチャー	1	2
小計		8	43
合計		19	68

##### (1) 周辺言語的ストラテジー

周辺言語的なストラテジーには、上記の表 12 で示したような6種類が認められた。K19, K26, K28 の3名を除いて、12名が使用しており、最もよく使用されたのは「笑い」の16件で、ついで「音量」と「ポーズ」が3件ずつ観察された。母語場面と比較して、接触場面では笑いの使用の多さが目立つ。

以下、笑い、音量、そしてポーズの例をそれぞれ提示し分析する。

##### 例 11 : K16(笑い)

- 1 K16A あ!、(hhh)、忘れてきたーあー  
 2 J16B (hhh)、えー (hhh)、あれ、この間言ってたやつ  
 3 K16A うん、どうして、ごめん

上記の例で K16A の笑いは、謝罪のストラテジー「責任承認」の発話に付随して使用されている。FUIによると、KA は自分の罪を認めることとともに謝罪場面を深刻にしすぎないために笑ったと報告している。そのほかの場合では、次の発話をする前の時間稼ぎとして「笑い」が使用されていたり、相手に話に調子を合わせたりすることを意図する笑いがあった。

例 12 : K24(音量)

- 10 J24B マジで? えーだって、今日返してくれるって言ったじゃん  
 → 11 K24A (小さい声で) ごめんなさい、(hhh)  
 12 J24B じゃー(間)今週末ーで良い?  
 13 K24A うん

上記の例 12 において、K24A の音量の減少は「直接謝罪」に付随して起きており、K24A の謝罪する心情をより強く相手 J24B に伝えていると考えられる。その他の例においても、必ずしも「直接謝罪」に付随してはいないが、音量の減少によって KA 自らの謝罪の心情をより強く相手 JB に示していた。

以下は、ポーズの例である。

例 13 : K22(ポーズ)

- 1 K22A おはよう  
 2 J22B おはよう、おはよう  
 → 3 K22A (びっくりした顔をする、3秒間とまる)、あー、(顔を見て行動が硬くなる) あー  
 4 J22B どうしたの?

上記の例 13 では、K22A は J22B と対面し「おはよう」という発話している。ここで、J22B とあいさつを交わした瞬間、K22A は漫画のことを思い出し、「(びっくりした顔をする、3秒間とまる)」のように戸惑う様子を「3秒間止まる」という非言語を使って表している。このように、謝罪談話において「3秒間止まる」というのは、K22A は自分が起こしたこと、つまり自分の罪に K22A 自らも驚いており、なおかつ相手 J22B にも申し訳ないと思っていることを伝える合図である。さらにこの例では、その意図が「あー」という言葉で強調されている。

(2) 身体言語的ストラテジー

身体言語的ストラテジーとしては先の表 12 に示したように 6 種類が認められた。接触場面では周辺言語的ストラテジーよりも多く、「動作」、「視線」、「表情」、「身体接触」がよく使われていた。このうち動作のストラテジーとしては、「頭を下げる」、「一歩下がる」のようなものがあった。視線のストラテジーとしては、「JB と目を合わせる」、「相手の様子を伺う」のようなものがあった。表情のストラテジーには、「緊張が和らいだ表情」、「すまない感じの表情」のようなものがあった。さらに、身体接触のストラテジーには、「鼻を触る」、「手で自分の口を隠す」のようなものがあった。

以下は、「視線」の例である。

例 14 : K19(視線)

- 3 K19A (相手の様子を見る姿勢で) あ、あれさ、今日漫画
- 4 J19B うん、うん、うん
- 5 K19A (相手の目をずっと見る) 今日持ってくることにしたじゃんー
- 6 J19B うん

上記の例で、K19A は謝罪の前置きを開始するまで J19B の目を直視している。これは、自分の罪を認める場合に付随する身体言語的なストラテジーであると考えられる。その他の視線については、KA 自身の罪を認める発話に付随する視線、あるいは、KA 自身の罪を認めながら相手 JB の様子を伺う視線が見られた。

以上のように、接触場面での「非言語」は、母語場面に比べて「周辺言語表現」よりも「身体言語表現」も多く出現されていた。その理由として、接触場面では、KA 自らが非母語話者で自分の日本語での表現力が不足していると考えており、今後の JB との人間関係を維持するために自分の心情を JB により効果的に伝えるため、日本語の発話とともに非言語を付き加えたことが考えられる。

4.2.12 その他

謝罪談話には、直接的な謝罪ストラテジー以外にも、わずかではあるが周縁的なストラテジーが関わっている。「その他」として、「相手の提案を断る」「前置き」と「感謝」が観察された。

表 13:その他

	母語場面	接触場面
相手の提案を断る	3	0
前置き	0	3
感謝	1	2
合計	4	5

表 13 で示したように、母語場面では、「相手の提案を断る」が 3 件、「感謝」が 1 件出現した。母語場面では、KA と KB が親しい友人ということから互いに思っていることを自由に発話していた。その一つがネガティブ・フェイスへの要求である。つまり、KB による無理な要求に対し、KA は自分が弱者の立場であるにも関わらずその要求を断ることができたのである。

接触場面においては、「前置き」が 3 件、「感謝」が 2 件出現された。陳臻渝(2007)では、前置きの発話は、導入部に入れることによって本題の謝罪発話のクッションの役割を果たすものであること、また「感謝」は、相手との関係が修復されたと考え、感謝を示したものであると述べている。

5. まとめ

以上、友人同士の謝罪のロールプレイのデータから、韓国人の母語場面と日本語による接触場面における 12 のストラテジーの分析を行った。その結果、母語場面と接触場面のストラテジ



一使用が異なることが明らかになった。また、FUI からは KA は接触場面における謝罪行為を遂行するために、自身が持っている日本語規範をもとにコミュニケーションを図ろうとしていたと考えられる。

## 文字化の規則

- 、 ごく短いポーズ
- ? 上昇イントネーション
- ! 強調した発話
- h 笑い
- ( ) 非言語行動

## 参考文献

- Blum-Kulka, Shoshana. J. House and G. Kaser, eds. (1989). *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, New Jersey: Ablex
- 陳臻渝 (2007). 日本語会話における前置き表現—配慮の表現方法によって— 言語文化学研究言語情報編 第2号 pp.99-115 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
- ファン, S.K. (1999). 非母語話者同士の日本語会話における言語問題 社会言語科学 7(1), pp.37-48 社会言語科学会
- ファン, S.K. (2002). 対象者の内省を調査する: フォローアップ・インタビュー J.V.ネウストプニー, 宮崎里司編 言語研究の方法 pp.87-95 くろしお出版
- Goffman, E. (1971). *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*. New York: Halt, Rinehart and Winston.
- 池田理恵子 (1993). 謝罪の対照研究—日米対照研究 face という視点からの考察 日本語学 12 pp.13-20 明治書店
- 熊井浩子 (1993). 外国人待遇行動の分析(2)—断り行動を中心にして— 静岡大学教育部研究報告人文・社会学科編28(2) pp.1-41
- 守屋美佐子 (2001). 日・韓『謝罪』の定型表現とストラテジー 日語教育 18 pp.13-26 韓国日本語教育学会
- ネウストプニー, J.V. (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究 7 pp.67-82 大阪大学
- 大浜るい子 (1997). 日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的な考察 広島大学教育学部紀要第2部 第46号 pp.159-167